

フィリピン訪問プログラムより

ともしび
共生委員会ニュース

2017 年度　1 号

2017 年 5 月 12 日版

共生委員会ニュース「ともしび」　　スクールモットー「地の塩、世の光」

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

高等部の平和・共生学習

修学旅行、各教科の授業など 3 年間を通して平和と共生について学んでいきます。平和共生 LogBook に一人ひとり違った足跡を残しながら、考えていきましょう。

3 年間の流れを紹介

1 年生

聖書　「命のヴィザ」杉原千畝の生き方を通して

国語総合　遠藤周作とアウシュビッツ・沈黙

英語　Playing the Enemy（人種差別政策アパルトヘイト撤廃後の南ア ラグビーワールドカップ）

生物　放射線被曝の影響

2 年生

聖書　“I for Japan.Japan for the world.The world for Christ.And all for God.”

現代文 B　戦争に関するテーマ(内容未定)

日本史 A(現代史)　太平洋戦争、アウシュビッツ収容所、原爆の歴史

現代社会　日本国憲法第 9 条

英語　Life in a Jar

物理　原子力と核兵器

修学旅行　平和講話、長崎原爆資料館、キリシタン弾圧の歴史

3 年生

聖書　「非暴力の歩みは、暴力を用いないことだけでなく、その相手を愛することである。」M・L・ King Jr 牧師の生き方を通して

現代文　共生に関するテーマ（内容未定）

英語　（内容未定）

平和共生に関する個人論文作成

その他

グローバルウィーク、学問入門講座「共生と平和」、岩手県宮古市の高校との交流、フィリピン訪問プログラムなど

平和・共生に関する活動に興味がある人は、声を掛けて下さい。

藤本、相良、武藤、吉成、キャロル、ベリーまで

フィリピン訪問プログラム報告「見て、聞いて、感じて」

ＨＲ３０５　0.C.

「フィリピンどうだった？楽しかった？」フィリピン訪問プログラムから帰ってきた私はよくこう聞かれ、どう答えればいいのか毎回悩んだ。フィリピン訪問プログラムは 3/20～3/25 の 5 泊 6 日の間に、私たちが礼拝の献金によって支援している子ども達に会いに行ったり、チャイルドファンドジャパンというフィリピンなどのアジアを中心に子どもやその家族をサポートする団体の地域センターに訪れることで、貧困や支援について学んだりするものだ。したがって事前学習を含め、様々な情報を頭に入れた状態で帰国をしたので、楽しかったという一言で済ませてよいか分からずとても困ってしまった。しかし私はみんなにこう言った。「すっごく楽しかった!!」と。なぜ楽しかったか、どのようなことを学んだのかは私の文章やフィリピン訪問に同行したメンバーとの事後活動で伝えられればいいと思ったからだ。

そもそも私はフィリピンに行くのは今回で 4 度目だった。今まで訪れたところは観光地として発展しているリゾート地ばかりで、自分の知らないフィリピンの姿を知りたい、直で現地の人の姿、環境に触れたいと思い、このプログラムに参加しようと思った。初めはイロイロ市というフィリピンの首都マニラから国内線で 1 時間の街に訪れた。そこで感じたのは街並みの移り変わりの激しさだ。所々に豪邸が立ち並び、大きなショッピングモールがあるところもあれば、一面が畑でその中にぽつぽつと竹などで作られた家があるところもある。このような格差を目の当たりにし、またその後の夜のミーティングでいかにこのような問題を解決することが難しいかが分かり、途方に暮れてしまった。そのような状態で、3 日目にはギマラス島というイロイロ市から船で 20 分の島に訪れた。ここでは島に住む子ども達と交流する時間が多くあり、子どもが少し苦手な私はみんなと仲良くできるかとても不安だった。しかし現地の子どもはみな私たちに明るく接してくれ、言葉の壁もほとんど感じることなくとても楽しい時間を過ごすことができた。私たちがその中で印象に残ったことは彼らの島に対する愛情と誇りだ。いくら支援をするといっても島を発展させてその愛情と誇りは絶対に失わせてはいけないのだなと実感し、支援の仕方が一筋縄ではいかないことを知った。これまで多くの問題点を見つけ出したが、これらをどのように解決していくかを見つけることができたのが最後にマニラに訪れた時だ。ここではチャイルドファンドジャパンの支援の仕方について詳しく知ることができた。その中のバリューフォーメーションという子どもやその親の精神的なサポートをする方法がとても重要なのだと思った。このおかげで子ども達の笑顔をギマラス島などで見ることができたのだと知り、お金だけではない支援の効果を感じた。

今回のプログラムでは映像や本などで感じる以上に生々しく貧困の現状を知った。私たちが触れてきた人々やその土地の温度を直接みんなに感じさせることはできないが、今後みんなに現地のことや、私たちが学んできた貧困問題、それに対する支援のことをより多くの人に、より詳しく伝えていけたらと思う。

被災地支援のあり方

ＨＲ２０７　T.R.

私は、高等部に入ってから、サーヴァントマインドという言葉から自分以外の周りの人のことを少しずつ考えるようになってきました。私がふとした瞬間に考えるのが被災地支援のあり方や被災地支援についての考え方です。なぜ、私がこのようなことを考えているかというと、私自身に被災経験があるからです。

これから、少しだけ私の被災体験を綴らせていただきます。

私は千葉県の浦安市に住んでいます。あまり知られていない小さな市ですが、2011年に起きた東日本大震災では、埋め立て地であるがゆえ、大規模な液状化被害が起きました。私の住んでいる地区では、水、ガスがとまり、計画停電により電気も止まり、ライフラインがたたれました。 当時通学していた小学校の校庭には自衛隊の補給車や仮設トイレが設置されました。スーパーに行っても買い占めにより食品コーナーに食べ物はありませんでした。幸い、津波などの被害はありませんでしたが、学校もしばらくは休校になったため、行く場所もやることも特にないストレスからか、ほぼ毎日５歳年上の兄とけんかをしていました。 恥ずかしい身内話のようですが、実際地震の発生によって、不便を強いられた状況下では子供にも大変なストレスがかかることは間違いありません。

さて、話は大きく変わりますが、昨年４月に起きた熊本の地震の存在はもちろん知っていますし、心を痛めたのも事実ですが、テレビのニュースを見ている時や新聞を読んでいる時に、遠い国で起きた出来事としてとらえているような自分がどこかにいるような感じがします。震災で水が出ないこと、物資がたりないことの苦労を経験しているのに、他人ごとのように捉えている自分が怖いです。また、日本全体でも東日本大震災のことも熊本地震のことも、一つの歴史的な出来事としか捉えていない気がします。つらい状況は継続していくのに、多くの人が一点だけ切り取り、そのときだけ同情しているように感じてしまうのは私だけでしょうか？



では、「私たちが他人にならないためには何をすればいいのか？」ということを考えるとき、真っ先に浮かんでくるのはボランティア活動だと思います。もちろん、困っている人のために「何か自分にできることはあるのではないか」とそれぞれが考えることはとても大切です。ただもう一つ覚えていてほしいことは、ボランティア活動が現地の人々にとって迷惑になりうる可能性もあるということです。

自分たちの日々の物資も不足しているなか、全国から大勢の人が押しかけてきたらどう思うでしょうか？ 私が考えるボランティア活動の問題性はここにあります。 衝動的、同情の感情から生まれたボランティア活動は一時的な物であるということです。「かわいそう」「大変そう」だから行くという場合、「かわいそう」という気持ちが薄れた時点で終わりです。つまり自己満足で終わってしまうということです。 本当に必要なのは継続的かつ現地の人々に寄り添った支援です。まずは、自己満足で終わらないためにその出来事を忘れないということです。

私の祖母の家の近くの避難所を訪問したとき、一人の女性と出会いました。そのとき彼女は「家を失ったことも悲しいのだけれど、この地震が昔のこととしてわすれ去られていくのが一番悲しい。」と私に話してくれました。物資を送るのだけが支援ではありません。思いを寄せることも十分な支援なのです。

次に"物資面での支援はよく吟味をしてから"ということが挙げられます。日本には四季があるので、当然季節によって必要とされる物も違ってきます。たとえば冬の寒さが厳しい東北地方の被災地では冬場では厚い毛布や仮設住宅のすきま風をしのぐための木材なども必要としているものだと思います。こうした少しの配慮があると物資を支援する側と支援される側の間に幸せの相互関係が生まれます。

三つめに被災した中には外国人もいるということがあります。祖母の家の近くにある私が訪ねた避難所にはイスラム教徒であるアラブ人の一家がいました。彼らは豚肉や酒の禁止という宗教上の理由から避難所で行われる炊き出しの豚汁や味噌汁を食べることができずに苦労していました。

災害時くらいそんなこと破ってもいいじゃないかと思う人もいるでしょうが、そんなときだから神を 信じる気持ちやすがるように祈る気持ちがあるのも誰しもなんとなくわかることだと思います。異文化を持った人々でも生活を共にできるような受け入れ体制が必要だと痛感しました。

最後に、まずはしっかりと自分たちの目でホントウのことを知るということです。メディアを通してではなく、自分たち自身で事実を確かめるということは私たち現代人に不足している能力でもあります。

何もかも流されてしまったり壊れてしまったりした街が、６年の歳月をかけて少しずつではありますが復興しつつあります。現地の人々は過去を受け止めつつ前を見つめています。もしかしたら、いつまでもあいまいな「過去」を引きずっているのは被災もしていない私たちなのではないでしょうか。

これが実際に私が経験したことと、感じたことです。熊本や東北での地震が過去のものとして忘れ去られないためにも少しでも多くの方々に目を通していただけたら幸いです。

※この文章は、高等部の取り組みや自身の体験をふまえ、自主的に寄稿してくれたものです。

今後も意欲的に関わってくれる人を歓迎します！

「山の手空襲を語り継ぐ集い」

昨年行われた、表参道周辺の空襲被災について体験者の方と交流を行う「山の手空襲を語り継ぐ集い」が、今年も開かれます。

私たちが通う高等部の周辺も、昭和２０年４月、５月の空襲で大きな被害を受けました。戦争の現実を「見て」「聞いて」「考える」またとない機会です。ぜひお誘いあわせの上、ご参加下さい。

日時：２０１７年５月２８日（日）　１３：３０～（２～３時間程度を予定しています）

場所：神宮前御田記念会館（神宮前 6-31-5　明治神宮前駅徒歩２分、原宿駅徒歩６分）